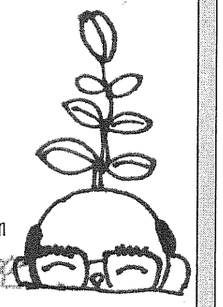
ねがいのいえニュース　第4号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2004年5月20日発行
発行責任者：藤本真二　〒331-0071 さいたま市西区高木185−29
Tel（048）626−1909　Fax（048）626−1920
E-mail　negainoie@r6.dion.ne.jp　Hp　http://www.negainoie.com



暖かさを通り越して暑い日々がやってきました。皆さまお元気でお過ごしですか？

超多忙だった春休みもあっという間に終わって落ち着きを取り戻したねがいのいえのスタッフたちは、今はお昼に子供がいないのを寂しく感じております。毎日あちこちの公園で見た桜は素晴らしく美しく、こんなに楽しい日々を運んできてくださったお客様に感謝でいっぱいです。

今回も最近の出来事や日々感じたことを報告いたします。

３月２８日ボランティア研修に１５名の希望者が集まってくれました。

ボランティア研修と言いながら実は施設職員に行っているハイレベルな内容で、障害児を発達させる運動療法、介護技術、そして障害を持つ方のための心のケアについて講習しました。理論をかんたんに説明したあとは実技を多く取り入れた体験中心の研修で、ねがいのいえスタッフが必修としているものです。障害児をお持ちのお母さんも参加されました。

ねがいのいえはノウハウもオープンです。この心のケアの技術に関しては、多くの方、特にご家族の皆さまは関心の高い話かと思います。次回から、ねがいのいえの中でどんなプログラムが行われているのかという話もお伝えしていこうと思っています。

２０ｃｍ以下の上履きで不要なものがありましたら寄付してください。

４月１日より介護保険のサービスは休止することになりました。

現在介護保険の利用者がなく、また、支援費による障害者の利用希望が急激に増え受けきれない状況になったため、やむなく介護保険のサービスは一時休止して障害者の方のニーズに専念することに決めました。介護保険のご利用希望者は数名来られましたが、その中のひとりの方の話題をお伝えします。

介護保険でデイサービスを利用したいという女性の方がご家族と共に登録に来られたのは、梅の便りを聞きはじめた２月の初めのことだった。さかのぼること１ヶ月前、近隣の老人ホームのケアマネージャーから紹介を受けていたが、ご本人の通院などの事情で利用が延びていた。

要介護度は２。ご自分で歩かれ、できることは何でも自分でされるというしっかりした方で、散歩や外出をたくさんしたいのだがご家族の手がまわらないため控えてらっしゃるとの話だった。まずは週２回から始めて徐々に増やしていく方針で、さっそく開始することとなった。

初日。ねがいのいえから車で１０分とかからないご自宅へ朝１０時に迎えに行くと、すでに身支度を整え玄関まで出ていらした。助手席に乗っていただき、何を話そうかと迷う数秒間の静かな緊張のあと「梅でも見に行きますか？」と尋ねたとたん、弾みのついた会話がとめどなく流れ出した。かなりの話し好きで、大宮公園の梅祭りまで行く車中で長年教員として勤めてこられた半生を語ってくださった。暖かな陽射しの下、みごとな花をつけた樹が立ち並ぶ枝の下を、休憩もとらずに約１時間、しっかりと歩かれた。「こんなにいい所につれてきてもらってありがたい」と繰り返し喜びの表情を見せてくださった。　昼食後はスタッフとおしゃべりをして大笑い。放課後に集まってきた子供たちと対面すると、社交的なダウン症の男の子が「こんにちは」と差し出した手を嬉しそうに握り返し、一緒におやつのテーブルを囲んだ。

こうしてデイサービスの初日はなごやかに過ぎた。

２日目もごく自然に通ってこられ、午前は周辺を散歩し、午後はスタッフとおしゃべりしたり、子供たちとおやつ作りをして過ごされる。スタッフの中で一番お年寄り好きの内藤香織がそばにいると、いつまでもおしゃべりと笑い声が絶えない。

その内藤が喜んでいただける場所をいろいろ工夫し、川越の町並みや盆栽町など、来られるたびに楽しそうな場所を探しては出かけた。午後はお疲れになるのか外へは行こうとせずに内藤とおしゃべりに花を咲かせる。聞き上手の内藤と２人一緒にいると、大きな笑い声が数分に一度絶え間なく聞かれた。

３日目の昼下がり、いつもの陽気さが見られず、話題は戦時中から苦労された教員時代のことなどに及び、昔を振り返られていた。洗濯や炊事などに誘うと喜んで手伝ってくださったが、専業主婦だった多くの高齢者とは違い、家事はあまり得意ではない様子も見てとれた。

午後から子供たちが集まって来ると自然に風船バレーが始まって、一緒に笑顔で遊ぶ光景が展開した。多くの施設ではスタッフが一生懸命に仕掛けて誘わなければ始まらないレクレーションの時間が、子供と老人が出会うことによって自然に生まれるこの空間こそ、年齢と障害の区別なく集う宅老所の良さなのだ。ダウン症の男の子のご家族は、いつも人に迷惑をかけてばかりですみませんと言われるが、彼の持つ天性のかわいらしさと誰にでも握手を求める社交性が、こんなにも出会ったお年寄りの心をほぐし元気にしてくれていることを伝えると、とても感激していらした。そして彼自身も、好きなお年寄りと一緒にいることで喜び、役割を見つけていたようである。スタッフもこの空間を心から楽しみ、そしてある種の感動にひたっていた。

２週間が過ぎ、近辺の楽しそうな場所はほぼ回った。次はどこへ行こうか、桜が咲く頃にまた回ることにして、いったん落ち着いてどんな過ごし方をしたらいいだろう、などと思いを巡らしていたその日、ケアマネージャーから一本の電話が入った。「検査の結果が出て感染症がないことがわかったので、今後はうちで引き受けます」

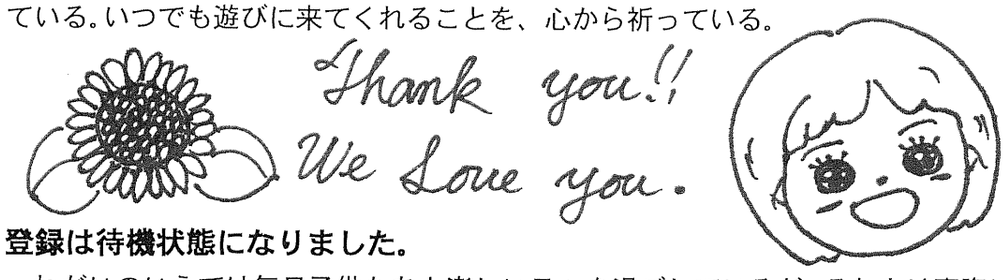
その夜の会議でみんなに報告した。内藤が両手で顔をおおって震えた。

ケアプランを立てるのはケアマネージャー。利用者がどこの施設へ行くか決めるのはケアマネージャーの仕事である。施設が多く隣接する地域では、ケアマネージャーが自分の施設にひとりでも多くの利用者を獲得しようと激しい競争が起きているこの業界で、仕方のない出来事だったかもしれない。はじめから検査結果が出るまでのつなぎにねがいのいえを利用しただけだったようである。

しかし人と関わるこの仕事は、物を売買するわけではない。たとえ２週間であろうと、一日であろうと、ひとりの人と真剣に向き合い関わったスタッフは、その相手に真剣に心を通わせているということがわからない施設が世の中にはある。そしてねがいのいえには、ひとりの相手に深く向き合い、会えなくなることに涙を流すスタッフがいる。そのことを理事長は誇りに思っている。

その夜、内藤から退職の意思を知らせるメールが届いた。片道２時間近くかかる通勤を８ヶ月続けてきた生活は、大切な時間や大切な人にたくさんの犠牲をしいてきたようである。それは引き止めることのできない理由だった。

一緒にいるだけで落ち着いていく子供がたくさんいた。「かおちゃんが一番好き」という言葉を何度も聞いた。こんな個性のスタッフを失うのは大変な損失だが、利用者だけでなくスタッフの希望もかなえるのがねがいのいえの思いである。希望どおり、多忙な春休みが終わるのを待って退職することとなった。しかし時間のある時にはいつでもボランティアに来てくれるという彼女を、スタッフも利用者の皆さまも、みんなが待っている。いつでも遊びに来てくれることを、心から祈っている。



登録は待機状態になりました。

ねがいのいえでは毎日子供たちと楽しい日々を過ごしているが、それとは裏腹に、ご家族が大変苦労されているのはよくわかっている。施設や行政のサービスは、その時間帯はやってないとかその理由では使えないなど、やって欲しいことに応えてくれないと皆さまが言われるとおりである。そんな誰もやってくれないことをやるためにねがいのいえを始めた。それは出来ませんとは決して言いたくなかった。医療的ケアもやるために看護師になった。早朝でも深夜でも空いてる限り引き受ける。しかし日々お困りの方が多くいらっしゃり、毎日寄せられる訴えに応えきれない日がついにやってきた。１月より支援費の居宅介護の指定を受けて以来、利用希望は急増し、３月より登録を一時ストップすることになった。スタッフが増えるまでは当面、新たな登録を希望される方には待機していただいている。

ご兄弟で障害を持っているお子さん。懸命に働きながら障害を持つお子さんを育てている母子家庭のお母さん。重度障害のお子さんを抱えご自身も難病に耐えながら介護をされている方。皆さまが本当に困ってらっしゃるのがよくわかっているから、やむなく予約をお断りする時つらい気持ちでいっぱいになる。

送迎の途中で通りがかった桜の樹がみごとに美しかったので、車を止めお子さんのバギーを押して歩いた。真っ青な空に白く輝く花びらが、光に透けながら美しくそよぐのを下から見上げた。苦労されている皆さまの顔が思い浮かぶ。給料も休みも減るのを承知でねがいのいえに来てくれたスタッフたちが、毎日がんばってくれていることを考えた。

お子さんの小さな顔に自分の頬を寄せる。舞い降りて来る花びらの吹雪を浴びながら、みんなにたくさんの幸せがやってくるといいなあと思っていた。